東大病院だより

表題：海野溝山書

No. 61　東京大学医学部・医学部附属病院創立150周年記念号

東大病院を見守るベルツ博士像と桜

CONTENTS

◆医学部・医学部附属病院創立150周年記念行事について ……2

◆東大病院創立150周年に向けて　シリーズ第19回
ベルツ（1849～1913）生誕160周年
－わが国の近代医学導入と発展に尽くしたドイツから招聘された最後の外国人教師－
……（加我）……4

◆東京大学医学部附属病院の最近50年の歴史 ……（加我）……6

◆医学歴史ミュージアムの紹介（9）
－ 梅澤濱夫記念館 － ……（加我）……7

◆1世紀を越える歴史を終えた東京大学医学部附属看護学校（114年）・
助産婦学校（111年）記念碑建設される ……9

◆東京大学医学部附属病院小児医療センターの
立ち上げにあたって ……（五十嵐）…10

◆がん診療連携拠点病院の指定にあたって ……（宮川）…11

◆退任の挨拶 ……（上西）……12

◆退任の挨拶 ……（堤）……13

◆平成20年度の東大病院臨床研修医と専門研修医の動向
……（総合研修センター）…14

◆出　来　事（2月から4月）……15

◆東大病院の四季（春の彩り）……16

東京大学医学部附属病院
〒113-8655　東京都文京区本郷7丁目3番1号
東大病院の代表電話
☎03-3815-5411
東大病院のホームページ
http://www.h.u-tokyo.ac.jp/

医学部・医学部附属病院創立150周年記念行事について

平成20年5月9日（金）13：30～16：45
医学部・医学部附属病院創立150周年記念式典が皇太子殿下の御臨席のもと挙行される

皇太子殿下

東京大学医学部・医学附属病院は、安政５年（1858年）に神田お玉ヶ池に開設された「種痘所」以来、本年創立150周年を迎え、５月９日（金）、皇太子殿下の御臨席のもと東京大学大講堂で創立150周年記念式典が挙行された。

式典はNHK交響楽団（団友会）によるヘンデルの「水上の音楽」が流れる中、14時に開会され、小宮山宏東京大学総長、清水孝雄医学系研究科長・医学部長の挨拶に続き、皇太子殿下からお言葉を賜りました。その後、来賓のご祝辞、東京大学音楽部コールアカデミーによる「大空と」（東京大学運動会歌　北原白秋作詞）、「鉄門倶楽部ノ歌」の合唱、NHK交響楽団（団友会）による「大学祝典序曲」の演奏が行われた。

本式典の記念講演として、東大医学部の卒業生で免疫グロブリン IgE を発見した石坂公成氏（ラホイヤ・アレルギー免疫研究所名誉所長）による『私が受け継いだ科学者のフィロソフィー』、東大文学部仏文科の卒業生の大江健三郎氏（作家・ノーベル文学賞受賞者）による『「人間らしさ」の現在性』のお話しがあり、参加者に強い印象を与えました。最後に、1,000名を超える参加者が東京大学の歌「ただ一つ」を合唱して150周年を祝った。

式典のあと山上会館で記念祝賀会が開催され、約400人の来賓と卒業生が集い、盛会の裡に終了した。

小宮山東京大学総長

清水医学系研究科長

武谷病院長

織田敏次
世話人代表

中村式典委員長

会　場：東京大学大講堂（安田講堂）
出席者：約1,100名
式次第

オープニング
（医学部及び医学部附属病院の歴史映像紹介）

奏　　楽　『水上の音楽（ヘンデル）』
＜NHK交響楽団（団友会）指揮　家田厚志＞

開　　会　司会進行　渡邊あゆみ
（NHK アナウンサー）

挨　　拶　小宮山　宏（総長）
清水　孝雄（研究科長・学部長）

お言葉　皇太子殿下

祝　　辞　池坊　保子（文部科学副大臣）
金澤　一郎（日本学術会議会長）
唐澤　祥人（日本医師会長）

合　　唱　『大空と』（東京大学運動会歌）
＜東京大学音楽部コールアカデミー＞
『鉄門倶楽部ノ歌』
＜　同　＞

奏　　楽　『大学祝典序曲（ブラームス）』
＜NHK交響楽団（団友会）指揮　家田厚志＞

休　　憩

記念講演
石坂　公成
（ラホイヤ・アレルギー免疫研究所名誉所長）
【私が受け継いだ科学者のフィロソフィー】
司会　廣川　信隆
（前研究科長・学部長／細胞生物学教授）

大江　健三郎（作家）
【「人間らしさ」の現在性】
司会　永井　良三
（前病院長／循環器内科学教授）

奏　　楽　『マイスタージンガー（ワグナー）』
＜NHK 交響楽団（団友会）」指揮　家田厚志＞

合　　唱　『ただ一つ』（東京大学の歌）
＜東京大学医学部学生、東京大学音楽部コールアカデミー、出席者一同＞

閉　　会

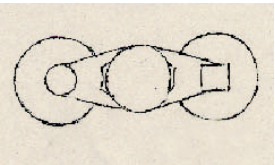
東京大学医学部・医学部附属病院創立150周年記念学生祝賀会

祝賀会と平行して学生による祝賀会が鉄門記念講堂とカポ・ペリカーノで開催された。

第一部として150周年記念モニュメントデザイン優秀賞賞状および副賞の授与式があった。

最優秀賞は M1 の平野智子さんデザインによる“Medicine”が選ばれた。そのデザインと本人による解説を以下に掲載した。なお、優秀賞として M3 の天野日出さんおよび鴨頭　輝さんの作品が選ばれた。

150周年記念モニュメントデザイン優秀賞賞状および副賞の授与式
平野智子さんと武谷病院長



モニュメントデザイン案（左）と＜上から見た図＞（右）
平野智子（医学部医学科 M1）

『二人の人が向き合い、手をとりあい、ひとつの球を支える像です。正面から見ると、全体として Medicne の「M」を象っています。手をとりあう二人の人は「医師（医療従事者）と患者」「医学部と附属病院」「教育と研究」とその協調関係を表現しています。

その手によって支えられた中央の球は「明日の医学と医療」と、それによって癒される「命」を表しており、これが「医師と患者」「医学部と附属病院」「教育と研究」の調和と協力によって達成されてほしいという願いが込められています。

表面を木目調にすることで、医学と医療のぬくもりを表現したいと考えております。』

医学部・医学部附属病院創立150周年記念 医学図書館お披露目開館と貴重史料展示会が開催される

医学部総合中央館（医学図書館）は、昨年の秋から行っていた耐震補強工事が完了したことから、図書館リニューアルオープンに先がけ、5月9日（金）10：00から16：45まで、お披露目開館と所蔵している貴重史料等の展示が行われた。

展示内容は、医学図書館史料室に収納されている「橋田邦彦博士像」鏑木清方画、「解體図」（通称：女囚解剖図）、「解體新書」、「牛痘發蒙」、「各骨真形図」、佐々木曠氏（明治16年医学部卒業）の講義ノート、総合中央館（医学図書館）竣工式（昭和36年）関係資料などであった。

また附属病院の協力により医学部卒業アルバムの写真パネル（永井前病院長作成）も展示された。

医学図書館は、7月14日（月）からリニューアルオープンの予定で、開館が大変心待ちにされている。

1. リニューアルされた医学部総合中央館（医学図書館）の外観

2. 展示の様子

3. リニューアルされた医学図書館閲覧室

東大病院創立150周年に向けて

シリーズ第19回　ベルツ（1849～1913）生誕160周年
―わが国の近代医学導入と発展に尽くしたドイツから招聘された最後の外国人教師―

1．生誕から来日まで（1849～1876、生誕～27歳）

ベルツ博士（1903年）

Erwin von Bälz は南ドイツのビーティヒ・ハイムに生まれた。シュトゥットガルトの高校を卒業したあと、1866年チュービンゲン大学に入学した。1869年医師予備試験を受けた後、ライプツィヒ大学に移り内科の臨床講義をウンダーリヒ教授より受ける。普仏戦争にも見習い軍医として参加の後、ライプツィヒ大学に戻り卒業した。博士論文は「球麻痺の1例」。ベルツが指導を受けたウンダーリヒ教授はそれまでのロマン派的すなわち狂信的科学主義と後に評された時代に、病理解剖と生理学の基盤に立った臨床医学を主張し実践した。現在も用いられている患者用の温度板を考案したことでも知られる。ベルツはたまたまライプツィヒ大学病院に入院した日本人留学生相良元良の治療を担当したことが日本に来るきっかけとなった。彼は文部省で医学の担当官をしていた相良知安の弟であった。相良知安は東大病院玄関前に記念碑があるように、明治になって医学はドイツ医学を導入することに決めた立役者である。明治政府は近代化のためにはあらゆる分野で各国から外国人お雇い教師を採用した。その一人としてベルツを東京医学校の内科教師として招いた。ベルツは考えた末決断して来日することにした。最後の外国人お雇い教師となった。1876年のことで、わずか27歳の時であった。その翌年に西南戦争が勃発するという混乱な時代でもあった。2年間の契約で来日した。それが26年にも及ぶことになる。

2．東京医学校から東京大学医学部教師の時代（1876～1902、27～53歳）

横浜に到着したが迎えはなかったという。その後東京大学のキャンパスとなる加賀屋敷内に住み着任5日目に生理学の講義を現在の三井記念病院の地にあった東京医学校で始めた。前任者が帰国したため初期は

産婦人科、薬物学も担当した。東京医学校は1877年（明治10年）に東京大学となり、現在の本郷の地区に移り医学部が出来、新しい建物で講義を始めた。その後は、内科外来診療、講義は内科臨床講義、診断学、病理各論、精神病学を担当した。当時の診断法は身体観察と聴打診しかなく、レントゲンでさえベルツが東大病院を去る4年前に開発されるという時代であった。しかしながら26年に及ぶ外国人教師の人生は多くの発見と医学知識の普及に貢献した。①コレラの予防法と治療、②日本で初めて発疹チフスの発見、③天然痘予防のための種痘の3回接種法、④脚気は伝染病であるが食べ物との関係を示唆、⑤肺結核予防のために青年の体力増強を奨励、⑥寄生虫病のうち十二指腸虫と肺吸虫発見、⑦温泉医学のすすめ、⑧精神医学では「情動マヒ」と「狐憑病」の質の高い論文、⑨人類学における「日本人の身体計測」などがある。温泉医学に熱心であったのは故郷の南ドイツは温泉浴で知られる地域であることと関係があると思われる。ベルツは伊香保温泉に別荘を建てた。草津温泉にもよく通いベルツ記念館がある。ベルツの名は一般の人々には美肌のための「ベルツ水」で馴染みが深い。成分は水酸化カリウム、グリセリン、エタノール、芳香剤、常水または精製水である。

ベルツの怒りと嘆き

ベルツの東京大学医学部での地位はいつまで経っても外国人教師であった。教授ではなかった。ベルツに学んだ初期の学生の中から基礎医学、臨床医学の各講座の教授が次々誕生した。時が経つにつれドイツ人教師が中心的役割をした時代が終わり、ドイ

草津温泉のベルツ記念館

ツ留学から帰国した日本人教授が中心となる時代に移っていった。それとともに自分が軽視されるように感じたベルツは1900年（51歳）に一度辞職を申し出たが和解した。1902年に53歳で教師生活を終えた。その前年に小石川植物園で日本在留25周年記念祝賀会があった。その時の本人の挨拶に自分自身の人生の最も良い年齢を捧げ東大医学部の卒業生に対する怒りと嘆きが表現されているので紹介する。

「日本人は西欧の学問の成り立ちと本質について大いに誤解しているように思える。日本人は学問を、年間に一定量の仕事をこなし、簡単によそへ運んで稼動させることのできる機械の様に考えている。しかし、それはまちがいである。ヨーロッパの学問世界は機械ではなく、ひとつの有機体でありあらゆる有機体と同じく、花を咲かせるためには一定の気候、一定の風土を必要とするのだ。日本人は彼ら（お雇い外国人）を学問の果実の切り売り人として扱ったが、彼らは学問の樹を育てる庭師としての使命感に燃えていたのだ。・・・つまり、根本にある精神を究めるかわりに最新の成果さえ受け取れば十分と考えたわけである。」

入院患者に対する東大病院の医師の姿勢についても次のように批判している。

「東大の先生方はすぐ研究室に行きたがる。しかし婦長さんを見てみなさい。自分もある患者さんを診たとき、婦長さんのほうがどれほど全部を理解して良く問題点をつかんでいたかわからない。われわれは患者さんのそばにいて考えなければいけない」と。

「医学は学問であるばかりでなく、技術であるということは幾ら繰り返しても多すぎることではありません。それでは一体何のために医者は勉強するのでしょうか。病気の人たちを治すためです。病人が医師を呼ぶのは医師がうんと勉強してうんと知識があるからではなく、その知識を病人に役立つように応用してもらうためです。そしてこの応用こそ、すなわち技術なのであります。」

現在創立150周年を迎え、現在でもベルツのこの批判は傾聴に値する。

3．宮内省東宮医務顧問（1902～1905、52歳～55歳）

ベルツは来日して以来東京大学を去るまで皇族の診療に当たった。明治35年宮内省東宮医務顧問として最後の2年間貢献した。これは勅任に準じる扱いとしてベルツも歓迎した地位であった。ベルツ以後、東大病院各科の教授が宮内庁病院の顧問医を担当している。

4．ドイツへ帰国から晩年まで（1905～1913年、55～64歳）

ドイツへ帰国したベルツは亡くなるまでの8年間、海外旅行と大英博物館やベルリン民族博物館で人類学的な研究を行った。1908年には晩年のハインリッヒ・フォン・シーボルトを訪ねたところ重病で自分の収集物の一切の処理を任された。1913年、慢性の呼吸疾患の悪化で亡くなった。お墓はシュトゥットガルトの森林墓地にある。

5．ベルツの銅像について

ベルツとスクリバの銅像はバス通りから医学図書館を見て右横にあり、東大病院をじっと見つめているかのようであるが、最初からここにあったのではない。ベルツが帰国してから2年後の1907年（明治40年）、現在の薬学部の庭の医学図書館に面する道路沿いに建立され、銅像の除幕式が行われた。すでにスクリバは亡くなっており、除幕席に出席するようにベルツは東京大学から来日を要請されたが断った。第二次大戦中は軍部の要請で他の銅像と一緒に兵器の材料として供出が命令された。しかし担当者の機転で難を逃れた。現在の位置に移動したのは1956年（昭和31年）のことである。全く同じ銅像は草津のベルツ記念館にもある。ベルツの著作には内科学、診断学などがあり東京大学医学図書館が保管している。ベルツやスクリバが使用した顕微鏡や医療機器は総合研究博物館の6階に保存されている。ベルツ並びにその妻のハナに関する伝記や物語など多数出版されている。　（加我　君孝）

参考1：東京大学医学部百年史．東大出版会　1967
参考2：安井広．ベルツの生涯．思文閣出版　1995
参考3：ベルツの日記．岩波文庫　1979
参考4：ベルツと草津．ベルツ記念館

東京大学医学部附属病院の最近50年の歴史

その1：昭和33年（1958）～昭和42年（1967）

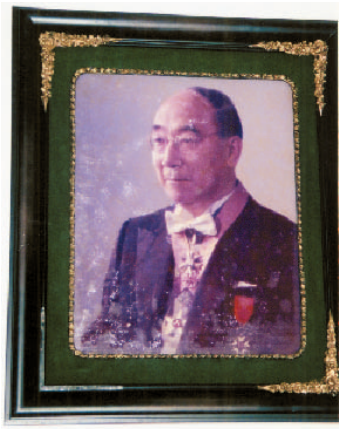
	医学部附属病院の動き	国内外の動き
昭和33年（1958）	４月　医学部薬学科が薬学部となる ５月　医学部創立100周年記念式典	４月　学校保健法交付 11月　EEC 発足 12月　東京タワー完成 国民健康保険取扱開始
昭和34年（1959）	４月　臨床検査部を中央検査部に改組	１月　キューバ革命 ４月　明仁皇太子（現天皇）ご成婚 ４月　チベット騒乱、ダライラマ14世インドへ亡命 11月　国民年金制度スタート
昭和35年（1960）	１月　形成外科設置 ６月　安保改定反対デモで医学部学生負傷 ７月　医学部本館左翼部分増築（法医・血清）	１月　ベトナム戦争始まる（1960-1975） １月　日米安保条約行政協定調印 12月　高度成長経済政策はじまる
昭和36年（1961）	２月　中央手術部に救急処置室設置 11月　ベルツ・スクリバ胸像移転 11月　お玉ケ池種痘所跡記念碑建立 医学部総合中央館（医学図書館完成）	４月　国民皆保険・皆年金の確立 ４月　ソ連　人間衛星打ち上げ ５月　米国有人宇宙飛行に成功 ８月　東ドイツがベルリンの境界線を遮断
昭和37年（1962）	４月　教養学部理科Ⅲ類発足 ４月　医用電子研究施設新設 ８月　老人科・麻酔科設置 ９月　鏑木清方作橋田邦彦生理学教授像寄託	２月　東京都の人口1000万人突破 ５月　国立大学医学部長会議がインターン制度決定 10月　ケネディ大統領キューバ海上封鎖を声明
昭和38年（1963）	４月　救急部独立	11月　ケネディ大統領暗殺 12月　教科書無償措置法
昭和39年（1964）	１月　脳神経外科学講座に外科学第3講座から名称変更 ３月　教室懇親会を有縁会と命名 ４月　中央材料部設置 ８月　中央放射線部設置 10月　財団法人東京医学会設置認可 12月　衛生看護学科を保健学科に名称変更	５月　全国医学部長会議インターン制度廃止決定 ８月　米ベトナム北爆開始 10月　東京オリンピック開催 10月　東海道新幹線開通
昭和40年（1965）	１月　胸部外科設置 １月　白木病理学教授と隊員13名がカラコルム遠征へ ２月　医学科授業時間数決まる 必須科目3920時間・選択500～1000時間 （基礎41.5％・臨床56.5％） ４月　保健学科発足 ４月　音声・言語医学研究施設設置 ４月　医学研究科設置 ４月　神経内科設置	４月　国立小児病院開設 10月　朝永振一郎ノーベル物理学賞受賞
昭和41年（1966）	１月　インターン制度反対し授業ボイコット・授業放棄 ４月　輸血部新設 ９月　医学部3号館竣工	５月　中国文化革命 ６月　ビートルズ来日 10月　中央教育審議会「期待される人間像」答申
昭和42年（1967）	１月　医学科学生ストライキ突入 ２月　医学部3号館入居 ３/17　スト中の医学科学生に対し全員戒告処分 ３/27　スト終息 ４月　放射線基礎医学講座設置 ５月　保健センター発足 ５/12　臨床実地修練妨害に関し学生及び研修生の処分 12月　奨学寄付金は全て委任経理となる	６月　第3次中東戦争 ７月　EC 発足 ８月　公害対策基本法公布

（加我　君孝）

医学歴史ミュージアムの紹介（9）

― 梅澤濱夫記念館 ―

梅澤濱夫　1914-1986（大正3年－昭和61年）



梅澤先生肖像画

「研究は問題を解くことが必要であるが、それ以上に解くことが可能な独創的な問題をつくることが更に大切である。」「研究の進め方は難しいが、最も重要なことは、研究者それぞれが、自分は世界的に最もすばらしい研究をしているという自信と哲学を持つことである」「治療薬の研究は、答があるかわからない問題を、答があるはずだと決めて追究する研究である」

自宅入口の表札と門

梅澤濱夫記念館は世田谷区玉川一丁目3-28の多摩堤通りに面している。自宅の広い敷地内にあり、入口には今も梅澤濱夫の表札がかかっている。2階建の記念館には、抗生物質開発に関連した資料、使用していた机や本などが生前そのままに展示されている。この記念館は1882年財団法人微生物化学研究会によって「疾病の予防及び治療に関する微生物生産物の知識の普及」のために、先生のご業績を物語る品々を保存し、展示することを目的として梅澤濱夫記念館が建設された。記念館の展示と梅澤濱夫の研究者としての生涯を紹介する。

梅澤濱夫は大正3年（1914）10月１日7人兄弟の第3子（次男）として福井県小浜市に生まれた。濱夫の

記念館全景

生い立ちのアルバム

遺品の眼鏡、時計など

名前はこの小浜に由来している。たまたま米国の大統領選のオバマ候補と同じ発音のためブームとなっている。

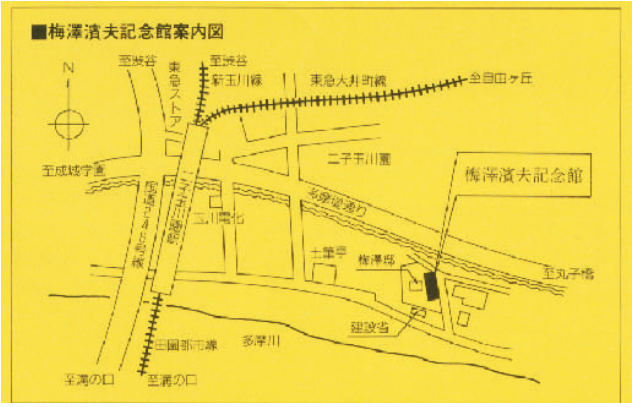
梅澤家は代々医者であった。そのうちの一人、江戸時代末に生きた梅澤良運（天保10年－大正11年）は D.B.Simmons（天保5年－明治22年）というアメリカ人医療宣教師に教わって外科医になったと言われる。濱夫の祖父、梅澤良三は安政6年埼玉県栗橋で

開発した抗生物質と抗ガン剤

記念館々長で梅澤先生の奥様の三重子様と、財団法人 微生物化学研究会理事長の野々村禎昭東京大学名誉教授

生まれたが、長じて眼科医となった。彼は郷士であり又有能な医者であった。彼はその郡の第5期医師会長に選ばれた。昭和5年栗橋で亡くなった。濱夫の父、純一は明治17年栗橋で長男として生まれた。長じて東京大学医学部を、極めて優秀な成績で卒業し（明治43年）、引き続き東京大学で生化学の勉強をした。彼は内科医となり大正2年小浜病院長に任命された。大正8年、梅澤純一は東大柿内教授の許で再び生化学を勉強をするために彼の家族と共に東京へ帰った。彼は大正12年、膜浸透圧の研究により博士号を得た。大正12年、父純一が札幌鉄道病院長に任命されたので家族は札幌に移った。濱夫はそこの北九条小学校に入った。

小学校を5年で卒業した後、昭和元年東京の武蔵高校中等部に入学し、更に昭和5年に同校に入り、昭和8年に卒業した。この時代彼は学校のすべての科目の勉強を心から楽しんだ。彼は良い先生に恵まれたが、なかでも、玉虫文一教授（昭和57年死亡）からはいろいろ教わった。玉虫文一氏は武蔵高校の化学及び物理化学の教授であったが、彼はベルリンのカイザーウィルフェルム研究所の Freundlich 教授の許で、コ



記念館地図

ロイド化学を勉強した人である。梅澤濱夫は昭和8年東京大学に入学した後も、学校が終わってから玉虫研究室で実験をしていた。ここで彼は初めて科学研究のやり方を学んだ。梅澤濱夫の明晰で正確な研究、さらに研究の中から真実を発見する能力はここで形成されたようである。

東大医学部に進学して最もいやな課目は解剖学であった。死体解剖は著しく食欲を減退させ、他の学部にもう少しで移るところであった。しかし2ヶ月後にはやや慣れ、後には全く平気になった。

戦争とペニシリン

昭和12年3月大学卒業後すぐ副手となり、竹内松次郎教授の下で細菌学を専攻した。彼ははじめ生化学を勉強しようと思っていたが、細菌学に変えた。7月に医師免許証を得た。

昭和12年南支那でコレラが蔓延したためその地域から帰還する兵隊の検便をするために9月に山口県下関市の下関検疫所に派遣された。彼は半年の間一日に千体ものサンプルの顕微鏡検査をしたので、左目が右目より小さくなってしまったという。

昭和18年秋、梅澤濱夫は陸軍軍医学校の軍医少佐稲垣克彦に逢い、同校研究部のメンバーになるよう誘いを受けた。日本は潜水艦が連合軍の監視をかいくぐって危険な航海の後にドイツから丁度持ち帰ったKlinische Wochenschrift（1943年（昭和18年）8月号）に M. キーゼ博士の書いた臨床的に非常によく効くペニシリンに関する記事を認めた。梅澤はこのキーゼ総説の翻訳を引き受けた。この論文を熱心に、又興奮して読んだ。梅澤濱夫による翻訳文は他の訳文と共に大学や研究所に広く配布され、ペニシリン委員会の成立と共に日本の抗生物質の発展への道を開いた。梅澤は上質のペニシリンの単離に初めて成功した。

カナマイシンの発見と微生物化学研究所の建設

昭和30年長野県の土壌からとれた放射菌よりカナマイシンが発見された。カナマイシンは当時の耐性ブドウ球菌、耐性赤痢菌を含む耐性グラム陰性菌、さらに耐性結核菌に効いた。かくてカナマイシンは市販され（昭和33年）、その臨床的有効性が注目を浴びた。

梅澤濱夫は自分の考えを自由に発展できる研究所を望んでいた。時の厚生大臣、橋本龍伍はカナマイシンの貢献に報いるため、カナマイシンのロイヤリティーを基金とした財団を作ることを勧めた。かくして（財）微生物化学研究会が昭和33年に作られ、梅澤は理事長になった。そして37年、東京の目黒の近くの小高い丘に微生物研究所が作られた。

他に経済的に研究所を支えたものは昭和39年に発見されたジョサマイシンであった。この研究は山之内製薬と共同でなされた。このマクロライド抗生物資はグラム陽性菌とマイコプラズマに強い抗菌力を示した。

制ガン性抗生物質の研究

早くも昭和25年の頃、梅澤は竹内と共にビールスに効く物質の探索をしていたが約2年間何の成果も挙げられなかった。彼の関心はビールスからガンに向かい、昭和29年にこの先端的研究はザルコマイシンの発見でむくわれた。これは極めて毒性の低い制ガン剤であった。

昭和34年梅澤とその共同研究者は低毒性物質フレオマイシンを発見した。しかしこの物質は詳しく調べた処不幸にして不可逆性の遅延性腎毒性があることを見出した。しかし昭和38年前田らと共に腎毒性のないフレオマイシンに似て酸に対する安定性が優れた物質ブレオマイシンを発見した。東京国立第一病院の市川教授はこの物質を注意深く調べ、扁平上皮ガンに強い治療効果のあることを発見した。後にブレオマイシンはホジキン氏病に著効を示すことが見出された。その後アミノ配糖体抗生物質の耐性機構を解明し、ジベカシンの合成や低分子酵素阻害剤を開発した。

以上のように次々と発表された画期的な抗生物質や抗ガン剤は高く評価され、文化勲章、日本学士院賞、レジョン・ドヌール勲章など国内外の多数の賞を授与された。ノーベル医学生理学症の候補でもあった。4名の子息は全員学者となった。家では巨人ファンで TV を見ながら勝敗に一喜一憂したという面もあった。

（加我　君孝）

1世紀を越える歴史を終えた東京大学医学部附属看護学校（114年）・助産婦学校（111年）記念碑建立される

医学部5号館（旧看護学校・助産婦学校）の前に、平成14年（2002年）3月に閉校となった東京大学医学部附属看護学校・助産婦学校の記念碑が建立された。

明治20年（1887年）10月医科大学第一医院において、英国人アクニースヴェッチによる看護法講義及び看病術実施練習が行われ、平成14年（2002年）3月まで5,500名の看護婦を世に送り出し、明治・大正・昭和・平成と続き114年の歴史を閉じた「東京大学医学部附属看護学校」の経緯と同校の校歌並びに明治23年（1890年）5月帝国大学、主任教授浜田玄達先生の建議により産科学教室内に産婆養成所が開設され、平成14年（2002年）3月まで2,600名の助産婦を世に送り出し、明治・大正・昭和・平成と続き114年の歴史を閉じた「東京大学医学部附属助産婦学校」の経緯と同校の校歌が刻まれた銘板が記念碑に敷設された。

記念碑

東京大学医学部附属病院小児医療センターの立ち上げにあたって

小児科
科長　**五十嵐　　隆**

新臨床研修制度になってから早くも4年が経過しました。この間に医療の現場には大きな変化が見られています。特に病院勤務医が現場から立ち去ることによる「医療崩壊」が社会問題になっています。小児医療の分野でも同様の現象が見られます。この数年間で地方の病院小児科が20%以上減少しています。毎年新たに小児科医になる医師も以前の約500名から約450名に減少しています。

現在のわが国の一病院あたりの小児科勤務医数は平均2.3人でしかありません。多くの小児科勤務医の労働時間は週70時間を超え、しかも当直回数は月平均5-7回です。当直明けの勤務も日常です。このような労働環境が原因の一つとなって、勤務医を辞めて開業する小児科医が増えています。病院小児科の崩壊を防ぐことを目的に、2007年に日本小児科学会は入院診療を集約化した小児科拠点病院構築を公表しています。

東京大学医学部附属病院小児科は昭和20-30年頃には72床の入院ベッドを持っていました。しかしながら東大紛争終了後には様々な理由から入院ベッド数を30床程に縮小していました。2001年の新病棟Aの完成時に小児系のベッド数は95床に増床されました。現在の当科には東京都内だけでなく近隣の県からの患者紹介が増え、入院患者数が急速に増えています。

本年7月から東大病院に小児医療センターができます。かねてから運用上に問題があった GCU（NICUから退院できるが未だ体重が少ないために保育の必要性のある新生児・乳児のためのベッド）を6床から16床に増床し、機能的な NICU にします。また、一般小児系病棟の2人部屋を個室にし、感染症患者の診療がしやすい環境を整備します。このような運用をする結果、小児系のベッド数は100床になります。故高津忠夫小児科教授は40年以上前に東京大学に小児病院を作る構想をお持ちでしたが、その構想がかなうことはありませんでした。欧米や近隣諸国の有名大学病院には必ず小児病院（小児医療センター）が付設されています。現在のスタッフ数や activity の面から見ると小児病院と呼ぶにははなはだ不十分な状態です。しかし、小児外科、心臓外科、脳外科、耳鼻科、整形外科など関連する各科と協力し、重症患者の治療、地域医療への貢献、小児医療と医学を担う人材の育成、研究、教育に努力し、この小さな小児医療センターを発展させる所存です。幸い当科には新研修制度になってからも11-13名の専門研修医と数名の卒後10年以上の臨床経験を持つ小児科医が毎年集まっています。彼らの若い力と humanity の気持ちを結集させたいと考えます。この小さな小児医療センターに御支援を戴きたく、お願い申し上げます。

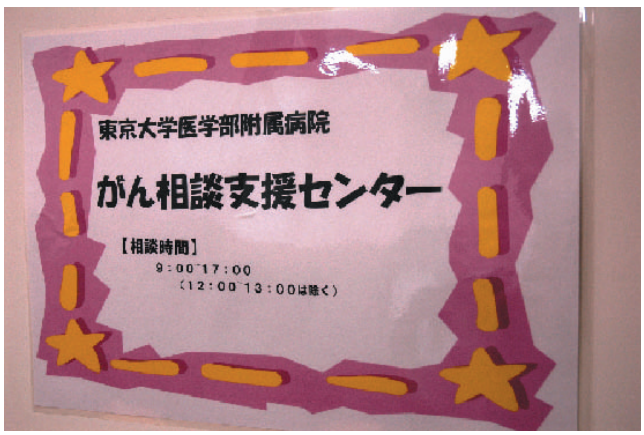
がん診療連携拠点病院の指定にあたって

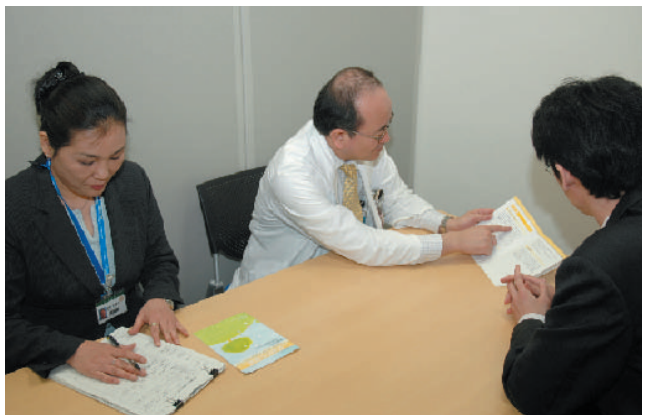
キャンサーボード室長　宮　川　　清

がん診療連携拠点病院は、院内におけるがん診療の発展とともに地域におけるがん診療連携の実践と情報提供を推進することによって、わが国におけるがん診療の均てん化を図るために、厚生労働省が指定するものです。東京都では数年前の指定を見直して本年度からの指定病院を厚生労働省に推薦するために、約１年前から都内の指定希望病院を募り、膨大な項目におよぶ調査を行ってきました。その結果、東大病院は都の二次医療圏では中央部（文京区、台東区、千代田区、中央区、港区）を担当する、地域がん診療連携拠点病院に指定されましたのでご報告いたします。わが国のみならず世界の医療の発展に貢献することを重要な目標とする東大病院にとっては、がん医療の均てん化が主な目的である本事業はむしろ新しいことかもしれませんが、具体的に必要とされる事業を見ますと、これからの医療の発展において重要な内容がありますので、ご紹介いたします。

医学の発展にもかかわらず、がん死亡は依然としてわが国では死因の第一位を占めています。大学病院における医療が適応とならない時に、どのような医療機関が対応するのかはがん医療の大きな問題です。これまでも一般の医療連携は皆様のご尽力でかなり改善してきましたが、がんの治療法の発展により延命期間が格段に延びている時代においては、以前にも増して地域の医療連携を推進することが重要になってきております。そのためにはまず地域医療機関とのより緊密な交流と情報交換が必要となります。

この事業で重要視されている一つにがん相談支援活動があります。東大病院ではこれまでも同様の活動は行ってきましたが、今年からはさらに規模を拡大して「がん相談支援センター」において１回30分の予約制のがん無料相談を開始しております。がんに関する情報はインターネットの普及にもより、巷には質を問わない膨大な量の情報があふれています。その一方において、一般社会では広く知られていない専門的な新しい情報も増えています。このような情報を適切に提供することは限られた診療時間の範囲内では難しいものです。専門的な診療が少しでも円滑に行われますよう、この相談センターが活用されますことを期待しています。





このような目に見える活動以外にも、本事業はわが国におけるがん死亡を低減するために重要な役割をはたしています。その代表が、がん登録の業務です。皆様がわが国のがんの統計を見られる機会はこれまでにもあったと思いますが、そのような統計があるのになぜ今ごろになってそのような業務をと疑問に思われる方もいらっしゃると思います。実はがん登録においてわが国は後進国なのです。既に欧米諸国では統一した様式でがん登録の体制が整備され、その結果は国のがん対策に生かされています。各病院の診療には直接役立つ情報はすぐには得られないにしても、わが国におけるがん死亡の低減が可能となる事業であることは明らかであり、そのためにはより精度の高い登録が必要となります。東大病院では2年前より院内がん登録が開始されていますが、今年より事務担当者を増員し院外での研修参加も含めた教育活動により登録作業のレベル向上を図っています。

国と東京都が定めるがん診療連携拠点病院の整備条件は多数ありますが、以上紹介した点を今まで以上に強化すること以外には診療面において大きな追加・変更する点はありません。院外では、指定された病院が集まってがん診療連携協議会が設立され、各病院の情報を交換するとともに東京都全体の問題点の解決に向けての活動があります。このように、がんで苦しむ方を少なくするためには、日頃の個々のレベルにおける診療に加えて、社会全体の取り組みも必要であることが重要な点です。人間社会の幸せのために、広い視野からのご理解をいただけましたら幸いです。

退 任 の 挨 拶

胃・食道外科、乳腺・内分泌外科
教授　**上　西　紀　夫**

大学卒業当時、日本人の死因のトップであった胃癌の診断、治療に興味を持ち、１年間の外科研修後の昭和50年に東大分院外科（旧第三外科）に入局しました。教室は胃カメラ開発の施設で豊富な症例の実績があり、さらに自由闊達な雰囲気であることに魅せられたからでした。以来33年近くが経ち、そして、平成9年4月に教授を拝命してから11年が経ちました。

この間、とくに教授就任後の月日は、教室にとって様々なことがあり、まさに激動の日々の連続で、あっと言う間に過ぎてしまったように思えます。すなわち、大学院の部局化、目白台の東大分院から本郷の東大本院への移転、そして大学の法人化という大きな波が次々と押し寄せて来たことです。

振り返ってみれば、団塊の世代の真只中の一人であり20世紀から21世紀への移り変わりに生きていたこと、大学入学後にあの東大闘争が起ったこと、そして、教授就任をめぐって歴史上初めてのことが起こったことなどを考え合わせて見ると、このような運命にあったのだと改めて感じているところです。

さて、教授就任後の最大の課題は、21世紀の始まりと共に訪れる本院への移転でした。最終的には平成14年4月に移転が完了したわけですが、移転に際しての大きな問題は、本院における居室、研究室、そして入院ベッドと手術枠が、１年近くにわたって十分確保されていないことでした。従って、教室の臨床面および研究面での基盤をどのように確立して行くのかが大きな課題でした。

臨床面においては、教室員の絶え間ない努力と頑張りに支えられ、新病棟のオープンに伴い徐々に手術数も増加しました。とくに、消化器内視鏡学の伝統を基礎に、鏡視下手術を取り入れ早期がんを主な対象として展開し、また、乳腺手術では温存手術を積極的に行ってきました。一方、いずれも進行した症例に対しては拡大郭清や補助療法を行い、cure と care を目標に、患者に優しくメリハリのある治療を目指して努力を重ねて来ました。お蔭様にて、一定の評価をいただけるようになったと自負しています。

しかしながら、最大の問題はスペースも時間も人手も不足している中で、研究をどのように維持、発展させるかでした。そこで研究面については長期的な展望に立って計画することとし、大学院生や若手の教室員を内外の研究施設に派遣し、共同研究を推進し、次世代を担う人材の育成に努めることにしました。従って、その成果が出るまでには当然、時間がかかることが予想されました。ところが思いがけずに、そして、大変嬉しいことに予想以上の早さで成果が挙がり、Science、Cell、Gastroenterology、Cancer Research などの海外の超一流雑誌に、論文を掲載出来るような人材が育ってきました。

この研究面に関し、私自身は胃癌の発生機序についていくつかの実験モデルを作製しながら研究を行っていました。そして、1990年代の半ばに H. pylori 菌と遭遇し、胃癌と H. pylori 菌との関係については日本でこそ、かつ、日本でしか解明できないと考え、研究を推進することにしました。予備的研究を行い、そしていくつかの幸運も手伝い、愛知県がんセンター研究所の立松正衛博士との共同研究が進み、H. pylori 菌が胃癌発生において重要な役割を果たしていることを、世界で初めて実験的に証明することが出来ました。そして、これらの研究を通じて「慢性炎症」が癌の発生にとって極めて重要であるとの考えに至りました。

教室の柱は、大学院部局化に伴い消化管外科学と代謝栄養内分泌外科学の2つで構成されていますが、外科代謝栄養の分野においても、研究と臨床面での実績を挙げて来ました。とくに外科侵襲をテーマとして多くの研究成果を発表して来ていますが、この面においては「急性炎症」が大きな役割を果たしています。

そこで、教室全体の研究テーマを「炎症と外科」とし、消化器癌の発症や進展における炎症の役割、癌の治療や手術侵襲における生体反応と炎症の役割について検討を行い、外科臨床への応用を模索してきました。少しずつではありますがその成果が現れ、研究と臨床を担う人材が育ちつつあります。

さて、これまで述べてきましたように、ここ11年間は教室にとってまさに大きな変革期、激動期であり、ある意味で０（ゼロ）からのスタートでした。それにも関わらず、教室員の頑張りと多くの人の支えにより、本郷の地に確固たる基盤を築くことが出来ました。このような中で、人の考え方、人のありよう、それとは時に乖離する組織の論理など、様々なことを経験することがで、また色々と考えさせられました。とくに分院の「文化」と本院の「文化」との相違を感じ苦労したことも数多くありましたが、ある意味では大変勉強になった11年でもありました。

兎にも角にも任期を終え無事に退職を迎えることが出来ましたのは、分院・本院で一緒に働いて下さった皆さん方、学会を通じてご指導いただいた先生方、友人のご支援、そして家族のサポートがあったからこそと思っています。改めて心より感謝を申し上げます。

4月1日より、研修医時代にお世話になり、医師としての基礎を育ててくれた公立昭和病院に赴任しますが、東大病院の研修指定病院でもありますので、今後も色々とお世話になることが多いと思います。何卒、よろしくお願い致します。

最後に、改めて東大医学部、東大病院に御礼を申し上げますと共に、何よりも、東大病院のますますの発展を心よりお祈り申し上げます。

平成20年3月吉日

退 任 の 挨 拶

女性外科
教授　**堤　　治**

東大病院の皆様、長年大変お世話になりましたが、この度産科婦人科学教室教授を退任し、国際医療福祉大学、山王病院に転出いたしました。昭和51年産科婦人科の研修医として勤務を始めてから32年、関連病院出張の2年を除いても30年間ですが、あっという間のような気もいたします。長年同じ職場でご一緒させて頂き、ご指導頂いた皆様にお礼の気持ちを込めてご挨拶申し上げます。

産科婦人科は昭和51年当時から既に、多忙で人手不足が叫ばれていましたが、幸い東大は全国から研修医が集まり、指導体制にも恵まれ、同期の仲間と出産や手術に明け暮れ楽しい研修生活を送らせてもらいました。最初の5年程で、出産から子宮癌の手術までマスターさせて頂ける産婦人科の臨床教育システムは、誇るべきものであるとも申せましょう。

産科婦人科学教室では臨床の合間に研究も盛んです。私が取組んだ研究テーマは卵子や初期胚の代謝でした。今でこそ体外受精は日本でも年間10万件が実施され、卵子や胚への関心は高くなっておりますが、当時は「蘭学事始」的状態で、ドキドキしながら顕微鏡の下で卵子や胚を操作したものです。その後研究や臨床の仲間も増えて、現在では東大の IVF センターは、実施件数は公的機関では最多で、成績でも日本有数です。ここまで育てて頂いた関係者の皆様に感謝いたします。

東大病院と私の関わりに、医局長会議があります。昭和63年から平成4年まで産婦人科の医局長として会議に参加しましたが、後半は会議の議長として大勢の医局長先生方のご協力を頂きました。非常勤医員各科への割り当ては各科の思惑もあり、なかなか難しいものがありました。そこで「堤の式」というものを考案し、運用したのですが、その後10年以上使用されたとお聞きして苦笑してしまいました。

臨床面では、平成4年当時新任教授であった現武谷雄二病院長より腹腔鏡下手術の導入をお任せ頂いたことが大きな転機でありました。手術部の皆様のご協力も頂き、新しい術式を開発し、適応範囲を広げ、患者さんに感謝される毎日は医者としての最高の幸せな日々でした。目白台の分院に教授として就任させて頂いて後は、分院のほとんど全ての良性疾患を内視鏡手術で治療しました。現在は日本産科婦人科内視鏡学会とアジアパシフィック婦人科内視鏡学会の理事長も勤め、国内のみならず、アジアパシフィック地域における内視鏡手術の普及に努めようとしております。その源は東大病院であることを忘れません。

東大病院在職中最も記憶に強く残っておりますのは、東宮職御用掛として、雅子妃殿下の愛子内親王殿下がご出産に立ち会ったことです。小児科、麻酔科など病院の各科はもちろん看護部にも大変お世話になり勤めを果たすことができました。お世話になった皆様に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

国際医療福祉大学大学院では講義もいたしますが、主な職場はその関連病院である山王病院です。院長職という新しい仕事にも取り組みますが、一般外来や生殖補助医療、腹腔鏡下手術、妊娠や出産の現場でも患者さんをみていきたいと思います。地域医療の担い手でもありますので、患者さんをご紹介頂ければ有り難くお待ちしております。ちなみに山王病院リプロダクションセンターは土日も開いており、私も月月火水木金金で頑張っておりますので、近くにお出かけの節は、お訪ねください（URL:http://www.dr-tsutsumi.jp/）。

蛇足ですが、「ねんきん特別便」について一言。先日私のところにも年金記録のお知らせがまいりました。東大病院に始まり都立大塚と長野日赤が各一年ほどで空白のあるはずはないと思いつつ、封を開くと、研修医の昭和51年を初め、空白が3箇所！社会保険庁に相談にいく時間もとれず、困っているところです。皆さんも老後に備えて、年金記録には油断なく。

東大病院、職員の皆様の今後益々の発展を祈ってご挨拶の結びとさせて頂きます。

皆様ありがとうございました。

平成20年度の東大病院臨床研修医と専門研修医の動向

（総合研修センター提供）

第102回医師国家試験の合格率は過去10年で最高の90.6％であった。東京大学医学部の卒業生の合格率は新卒で92.6％、既卒が0％、平均90.7％であった。すなわち受験者総数は97人、合格者総数は88人であった。そのうち、東大病院での研修プログラムに応募して採用されたのは46人、卒業生の47％であった。東京大学を含め、41大学の臨床研修医が2年間にわたってトレーニングを受けることになる。

卒後3年目の各科別の専門研修医は多い順にトップ5は①整形外科・脊椎外科　16人　②形成外科・美容外科　15人　③女性診療科・産科／女性外科　13人　④精神神経科　11人　⑤消化器内科と放射線科が10人であった。科によって専門研修医の数は大きく異なる。

1. 平成20年度卒後臨床研修プログラム 出身大学別一覧

大　学　名	人　数
北海道大学	3
旭川医科大学	1
東北大学	5
山形大学	3
筑波大学	5
千葉大学	5
東京大学	46
東京医科歯科大学	1
富山大学	1
山梨大学	2
信州大学	1
浜松医科大学	2
岐阜大学	1
滋賀医科大学	1
京都大学	3
大阪大学	1
神戸大学	1
島根大学	2
広島大学	1
高知大学	1
佐賀大学	3
宮崎大学	1
鹿児島大学	2
札幌医科大学	1
福島県立医科大学	3
京都府立医科大学	1
奈良県立医科大学	1
大阪市立大学	2
岩手医科大学	1
慶應義塾大学	2
帝京大学	2
順天堂大学	2
昭和大学	3
東海大学	1
東京医科大学	3
東京女子医科大学	7
東邦大学	2
日本大学	2
日本医科大学	3
産業医科大学	1
久留米大学	1
計	130

2. 平成20年度専門研修プログラム 出身大学別一覧

大　学　名	人　数
北海道大学	2
東北大学	1
秋田大学	2
山形大学	2
群馬大学	1
筑波大学	1
千葉大学	3
東京大学	23
山梨大学	6
新潟大学	2
信州大学	3
富山医科薬科大学	1
金沢大学	2
浜松医科大学	1
三重大学	1
大阪大学	1
神戸大学	1
鳥取大学	2
佐賀大学	1
長崎大学	1
熊本大学	1
宮崎大学	2
鹿児島大学	1
札幌医科大学	1
福島県立医科大学	2
横浜市立大学	2
名古屋市立大学	1
大阪市立大学	1
京都府立医科大学	2
埼玉医科大学	1
北里大学	2
慶應義塾大学	1
順天堂大学	1
昭和大学	2
聖マリアンナ医科大学	2
帝京大学	1
東京医科大学	1
東京慈恵会医科大学	1
東京女子医科大学	1
日本医科大学	1
日本大学	1
東海大学	1
関西医科大学	1
川崎医科大学	1
計	88

※東大病院で研修を行う者を対象とした数値

3. 平成20年度東京大学医学部附属病院 専門研修プログラム 診療科別一覧

診療科目	平成20年度研修予定病院		
	東大病院	研修協力病院(外)	大学院
内科総合			
循環器内科		6	
呼吸器内科		2	
消化器内科	3	7	
腎臓・内分泌内科	2	5	
糖尿病・代謝内科	1		
血液・腫瘍内科	1		
アレルギー・リウマチ内科			
感染症内科	1		
神経内科	7	2	
老年病科	1		
心療内科	1	1	
外科総合	2	1	
胃食道外科・乳腺内分泌外科			
大腸肛門外科／血管外科	1	7	
肝・胆・膵外科／人工臓器移植外科	1	2	
心臓外科／呼吸器外科	1	4	
脳神経外科	2	4	
麻酔科・痛みセンター	7	2	
泌尿器科・男性科		1	
皮膚科・皮膚光線レーザー科	4		
眼科・視覚矯正科	9		
整形外科・脊椎外科	3	13	
耳鼻咽喉科・聴覚音声外科	6		
リハビリテーション科			
形成外科・美容外科	3	12	
小児科	8	5	
小児外科	1		
女性診療科・産科／女性外科	10	3	
精神神経科	5	6	
放射線科	5	5	
救急部	2		
病理部	1		2
合　計	88	88	2

※人数はいずれも平成20年4月研修開始時

出　来　事

平成20年２月～平成20年４月

2月5日（火）接遇講座「異業種に学ぶマナー」
時　間：17:30～19:00
場　所：入院棟Ａ15階大会議室
講　師：フォーシーズンホテル・接客担当支配人　喜多恭久氏
後援：総合研修センター
（接遇向上センター）

2月7日（木）
MLB 井口資仁選手、東大病院訪問
サンディエゴ・パドレス 井口資仁選手が、心臓移植待機の患者様の激励と心臓移植の現状を社会に広く知っていただきドナーについての社会の関心を高めたいという活動の一環として、本院を訪問した。

2月14日（木）
22世紀医療センター公開セミナーシリーズ（5）
時　間：16：00～17：00
場　所：中央診療棟2（7階大会議室）
内　容：司会　奥　真也　健診情報学（NTTデータ）講座
講演1　馬淵昭彦（臨床運動器医学講座）
講演2　臨床情報の電子化とクリニカルデータマネジメント
大津　洋（臨床試験データ管理学講座）

2月14日（木）接遇講座「看取りの文化」
時　間：17：30～19：00
場　所：入院棟Ａ15階大会議室
講　師：インターナショナル・メディカル・クロッシング・オフィス院長　堂園涼子氏
後　援：総合研修センター
（接遇向上センター）

2月19日（火）特別コンサート
時　間：16：45～18：00
場　所：外来棟１階エントランスホール
演　奏：ＮＨＫ交響楽団　宇根京子氏（ヴァイオリン）、梅田朋子氏（ピアノ）
（医療サービス推進委員会）

2月20日（水）
東大病院オーストラリア海外研修報告会
時　間：17：30～19：00
場　所：入院棟Ａ15階大会議室
（詳細は、東大病院だよりNo.60号掲載ページ参照）
（総合研修センター）

2月27日（水）第3回感染制御セミナー
時　間：18：00～19：30
場　所：中央診療棟２（７階大会議室）
テーマ：「感染性腸炎、クロストリジウム腸炎とその対策」
1）感染性腸炎の疫学と病像
森屋恭璽（感染制御部/講師）
2）感染性腸炎の病院感染対策
間平珠美（看護部/感染管理認定看護師）
3）クロストリジウム腸炎の病像と病院感染対策
畠山修司（感染制御部/助教）
（感染対策センター）

3月12日（水）
大学病院を考える議員連盟の東大病院視察
医療従事者の労働環境の改善等を諮るため、自由民主党と公明党議員による「大学病院を考える議員連盟」（会長　河村建夫衆議院議員、元文部科学大臣）が昨年12月に発足したことから、大学病院における救急医療、周産母子診療、小児医療等の重症者診療体制について、本院の視察が行われた。

3月13日（木）
八丈島フリージア娘、東大病院訪問
本院では、定期的に八丈島へ医師が診療に赴く等、地域医療に貢献しており、黄八丈姿のフリージア娘から色鮮やかなフリージアの花が本院に贈られた。頂いた花々は、患者様にも配られ院内に春の甘い香りが広がった。

3月14日（金）
リスクマネジメント研修（講演会）
時　間：18：00～19：30
場　所：臨床講堂
講　師：河野龍太郎氏（自治医科大学医学部医療安全学准教授）
演　題：「ヒューマンエラー低減対応活動」
（リスクマネジメント委員会、医療安全対策センター）

3月21日（金）
第一回東大病院いちょう保育園卒園式
平成19年4月に男女共同参画の推進に向けて「東大病院いちょう保育園」が開園されて１年が経ち、始めての卒園式が9：45分から園内で行われた。

3月21日（金）第8回東大病院臨床試験セミナー
時　間：17：20～20：30
場　所：医学部鉄門記念講堂（教育研究棟14階）
内　容：グローバリゼーション時代における治験実施連携体制の構築
（臨床試験部）

3月25日（火）ミニコンサート
時　間：16：45～17：30
場　所：外来棟１階エントランスホール
演　奏：新坂拡子氏（グランドハープ）
（医療サービス推進委員会）

4月1日（火）
平成20年度入職式及び合同オリエンテーション
9時から東京大学大講堂（安田講堂）において、4月１日付けで新たに職員となった看護師、検査技師、臨床研修医、事務部の新規採用者を対象に入職式及び合同オリエンテーションが開催された。

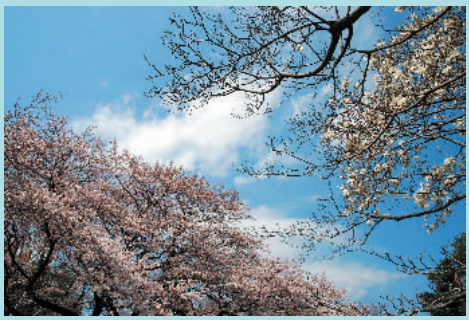
4月8日（火）個人情報保護講演会
時　間：18：00～19：30
場　所：臨床講堂
講　師：辻　純一郎氏（J&T Institute Ltd. CEO）
内　容：個人情報保護法とプライバシー保護
（個人情報保護推進委員会）

4月10日（木）
22世紀医療センター公開セミナーシリーズ（6）
時　間：16：30～17：00
場　所：中央診療棟2（7階大会議室）
内　容：司会　康永秀生（医療経営政策学講座）
講演　医学研究におけるインフォームド・コンセント
前田正一（医療安全管理学講座　客員准教授）

東大病院の四季

春　の　彩　り

春の始まりと共に院内の花木が一瞬の彩りを放った。平成18年6月に「鉄門」が再建された際に植樹された「紅しだれ」が大地にしっかり根を張り鮮やかな紅の花を咲かせた。また付近の花壇には、紅色鮮やかな「ベニバナトキワマンサク」の花が春の彩りを添えた。また看護師宿舎近くにある桜の木（桜と別の木が一つになった）が鮮やかな白い花を咲かせた。この木は何時ごろどのように別の木と一つになったか謎である。今年も外来診療棟前には、5月の薫風になびく色鮮やかな「こいのぼり」が掲揚された。


外来診療棟前の桜と辛夷

ベニバナトキワマンサク

紅しだれ

薫風になびくこいのぼり

看護師宿舎近くの桜の木

4月14日（月）ミニコンサート
時　間：16：45～17：30
場　所：外来棟１階エントランスホール
演　奏：浜渦勝子氏（ヴァイオリン）
（医療サービス推進委員会）

4月17日（木）
スウェーデン国首相夫人、東大病院視察
スウェーデン国フィリッパ・ラインフェルト首相夫人が本院を訪問された。同首相夫人は院内視察の後、スウェーデン・日本のがん対策に関する意見交換会に参加され、放射線科中川恵一准教授、キャンサーボード室長宮川清教授らと共に、両国におけるがん治療の現状と更なる改善について有意義なディスカッションが行われた。

※写真は左から、武谷雄二病院長、フィリッパ・ラインフェルト首相夫人、中川恵一准教授、グラジナ・ノレーン スウェーデン大使夫人、カイ・レイニウス スウェーデン大使館参事官

4月23日（水）
日本人の死生観の歴史研究会・第2回特別講演
時　間：18：30～20：00
場　所：中央診療棟2（7階大会議室）
講　師：北里大学名誉教授　立川昭二氏
内　容：日本人の死生観
（緩和ケア診療部、放射線科）

編集協力：加　我　君　孝

発　　行　平成20年５月31日
発 行 人　病院長　武 谷 雄 二
発 行 所　東京大学医学部附属病院
〒113-8655　東京都文京区本郷7-3-1
☎ 03-3815-5411
事務担当　東　大　病　院
パブリック・リレーションセンター
連絡先　☎ 03-5800-9193
E-mail: pr@adm.h.u-tokyo.ac.jp
印 刷 所　株式会社　学 術 社

東大病院だよりは、東大病院のホームページから見ることができます。　http://www.h.u-tokyo.ac.jp/outline/letter.htm
また東大病院だよりは、年４回発行し、外来診療棟１階ロビー、入院棟Ａ１階ロビーのパンフレットスタンドから自由にお持ちいただけるよう情報提供を進めておりますが、残部には限りのあることをご了承下さい。